

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) ※8月18日更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 31,000～33,500 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 34,200～35,500 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 13,000～14,500

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 134.000～147.000 円

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

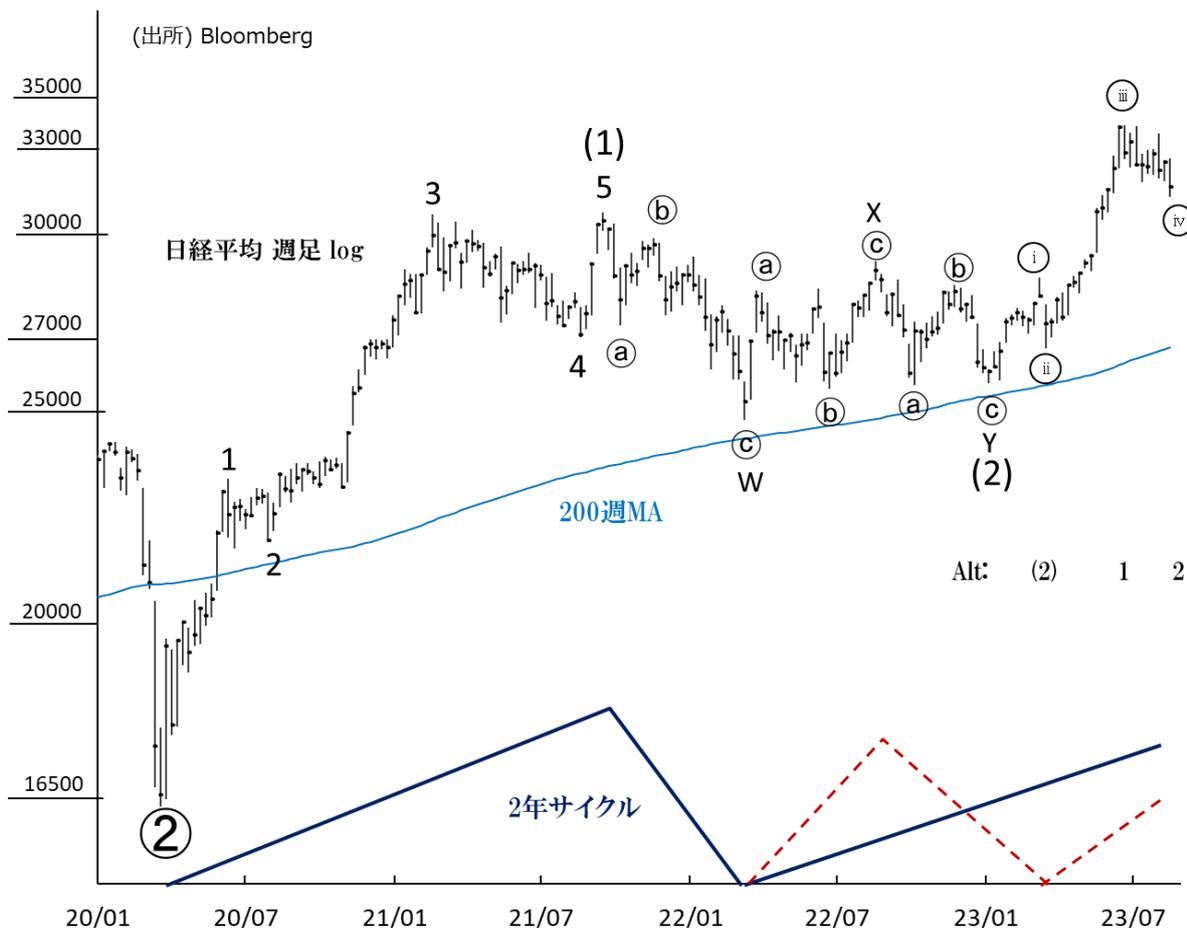
このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均

世界金融危機の底値を付けた 08 年 10 月以降、日経平均はおよそ 4 年周期で底入れしており、現在の相場はコロナショック底(20 年 3 月)を起点とする 4 年サイクルの中にあります。この 4 年サイクルは、二つの 2 年サイクル(2 年+2 年)で構成されています。22 年 3 月からは後半の 2 年サイクルに入っており、さらに今年 3 月(彼岸底)からは現行 2 年サイクル後半(1 年サイクル)に入っています。

現行 1 年サイクルのトップを付けるのは今年 9 月から 10 月頃とみていますが、それまで日経平均は上値追いの展開が期待できます。そして 24 年 3 月前後には 4 年サイクルのボトムを付ける見通しです。

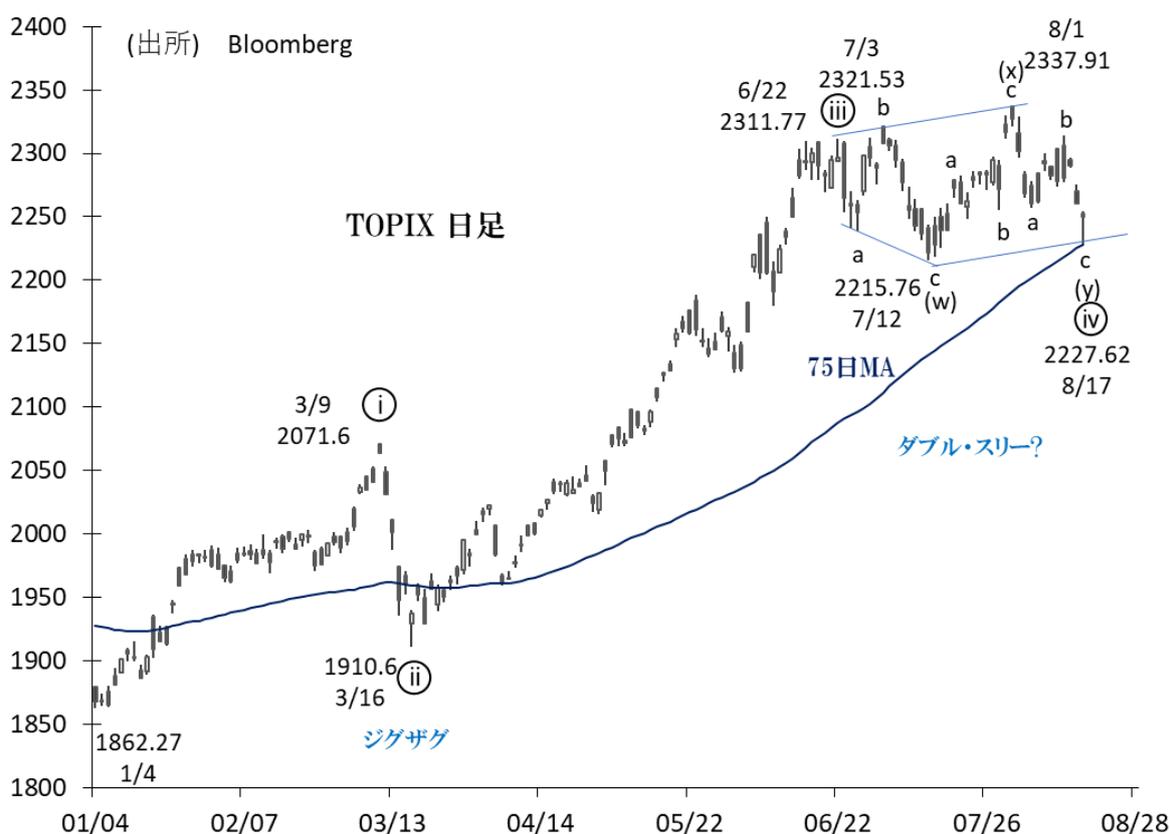


【週足・エリオット波動分析】

21 年 9 月からの第(2)波による調整は、今年の大発会安値(25,661 円)を以て完了したとみています。それはコロナショック底(20 年 3 月)から 34 カ月後(フィボナッチ数)に付けた、重要な二番底に当たり、そこから日経平均は第(3)波に入った、というのが基本観です。

第(3)波自体が 5 波構成(1-2-3-4-5 波)となります。足元は第(3)波中の第 1 波、その終盤戦に位置付けられます。

もう一つの見方(オルタナティブ・カウント、上図では Alt と記載)は、第(3)波中の第 1 波を経て現在第 2 波の調整にある、というものです。この見方だと、“③波-(3)波-3 波”のダイナミックな強気相場が始まるのはこれから、ということになります。



【TOPIX 日足・エリオット波動分析】

6 月下旬からのマル iv 波全体のパターン構造は、3 月にみられたマル ii 波の単純さとは打って変わり、非常に複雑な様相を呈しています。

先に結論から書くと、マル iv 波のパターンは「ダブル・スリー」とみられます。

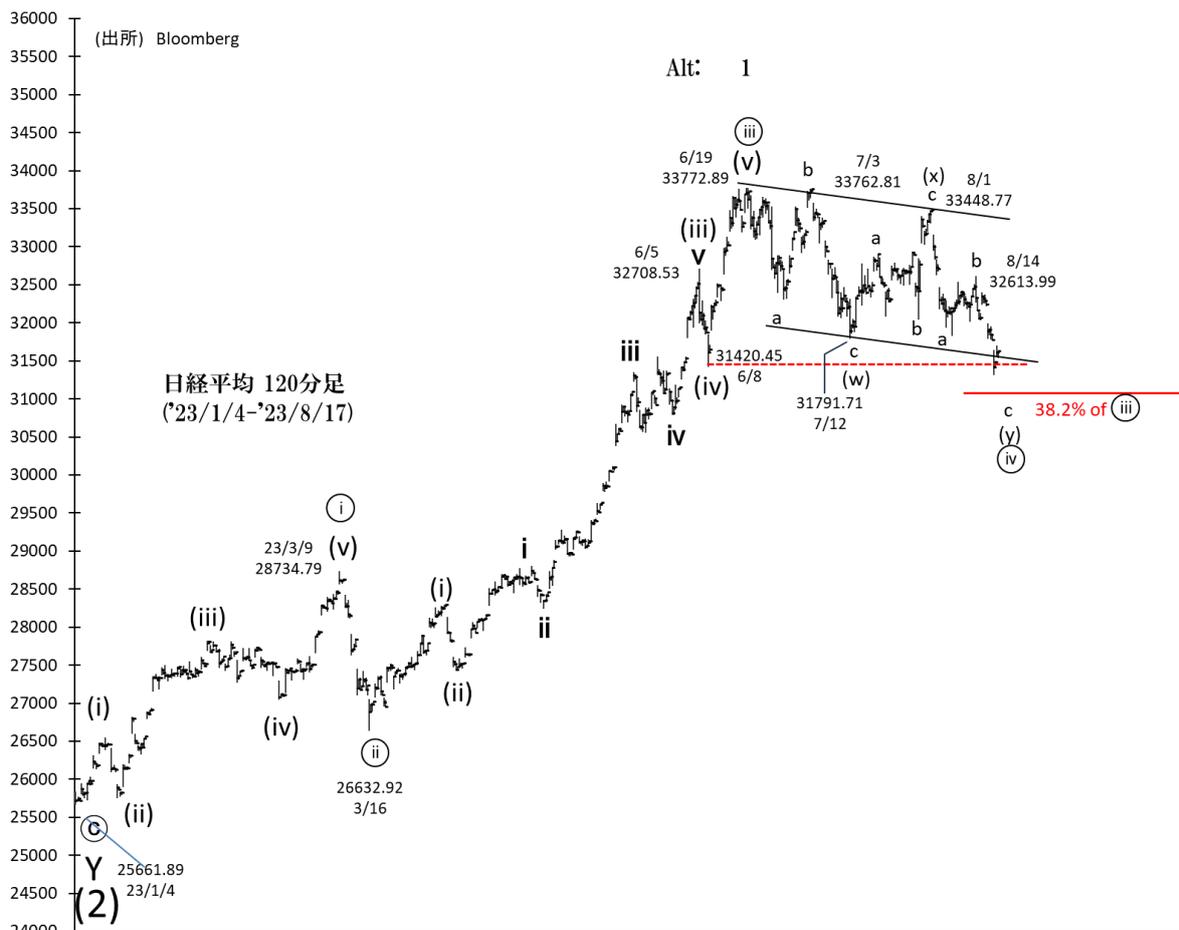
その内部構造についてですが、まずパターン前半の三波構成(スリー)調整は「エクспанディッド・フラット」(6/22～7/12)でした。2215(7/12 安値)から 2337(8/1 高値)にかけて三波構成の上昇(x)波を挟み、後半のスリーでは「ジグザグ」を形成しています。

8 月 17 日には一時 2227 まで急落しましたが、75 日 MA 水準でサポートされ、この日のほぼ高値で引けました。

そしてこの点が重要ですが、日経平均が 2 カ月半ぶり安値まで下げた反面、TOPIX は 7 月 12 日安値(2215)を下回っていません。今後も TOPIX が 7 月安値を維持する限り、日経平均と逆行する状態(強気ダイバージェンス)が維持され、それは日本株相場の強気相場再開を示唆します。

マル iv 波は終わりつつあります。この見方が正しければ、TOPIX はマル v 波の上昇により、9 月-10 月に 2400 処を目指す展開を期待できるでしょう。

[2417]...1989 年高値(2886.50)から 2012 年安値(692.18)までの下落に対し、78.6%戻り水準



【時間足・エリオット波動分析】

注目されたサポートレベル(3万1800円処)が破られました(8月17日)。これにより、33,772円(6/19高嶺)からのマル iv 波パターンを「シンメトリカル・トライアングル」としていた従来の波動カウントは無効になりました。

そこで今回より波動カウントを次のように見直します。

マル iv 波は[ダブル・ジグザグ]であり、33,448円(8/1高値)からの下げを2番目のジグザグ(a-b-c)と読みます。

直近、日経平均は7月安値(31,791円)を下回りましたが—前述のようにTOPIXは7月安値を維持しています—ノーマルな下値メドとしての31,420円(6/8安値)付近には—マル iii 波のレッサー・ディグリー(iv)波安値—既に下げています。

なおも下値模索が継続しても、[31,045円](マル iii 波の上昇に対し38.2%戻り水準)付近は強いサポートレベルであり、ここからの下げは限られそうです。

マル iv 波調整は終わったか終わりつつあり、マル v 波の上昇スタートが近い、と思われます。

【8月18日 10:21 更新】

NYダウ



【NYダウ日足・エリオット波動分析】

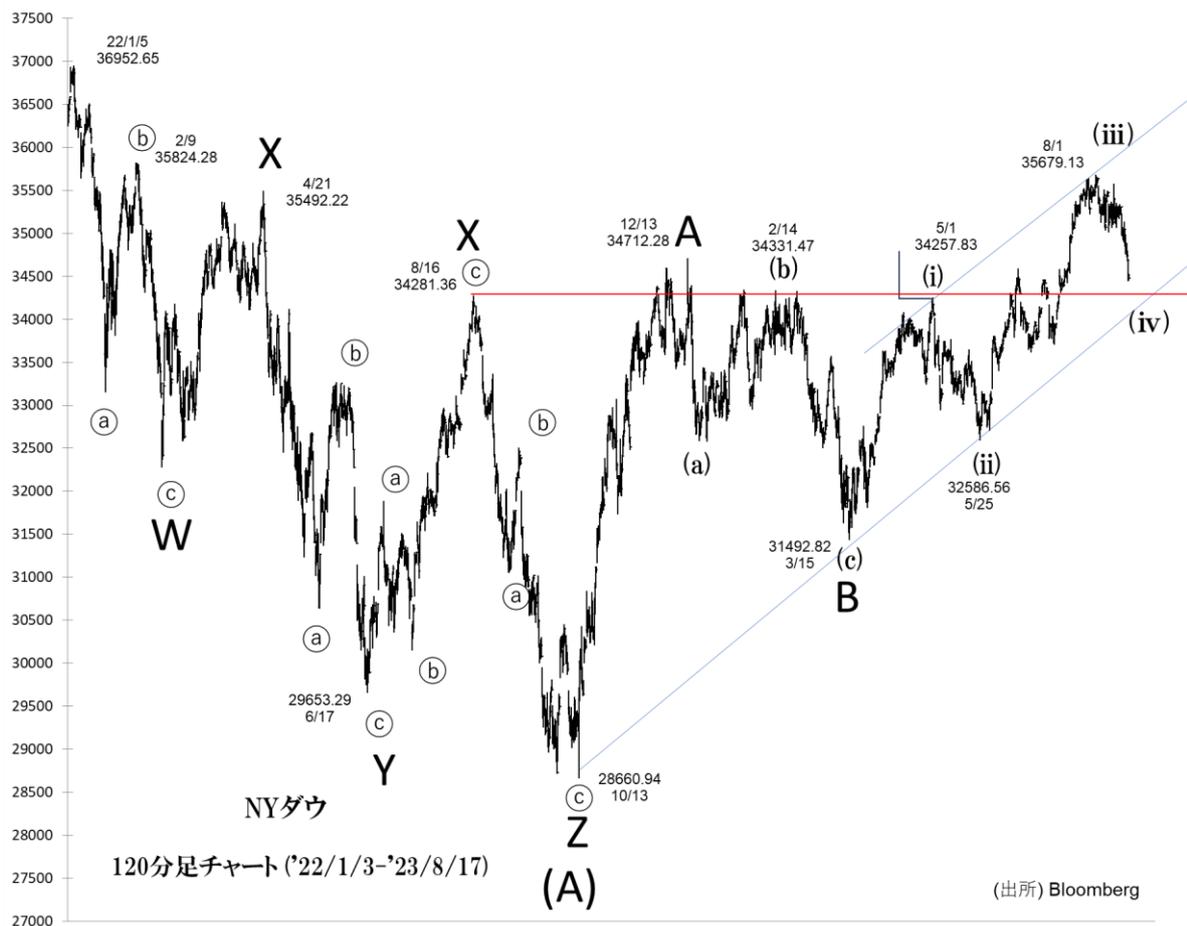
NYダウは22年1月高値(36,952ドル)から、プライマリー級④波を展開中とみています。

④波はトライアングルやダブル・スリーなど、この波動位置ならではの「複雑なパターン」を形成する可能性が高いでしょう。

22年10月から大きなリバウンド局面・(B)波が進行中とみられ、この(B)波のフォーメーションとして三波構成(A-B-C)を想定しています。(B)波は修正波でありながら、NYダウを過去最高値に押し上げるポテンシャルを有しています。

31,429ドル(3/15安値)からの上昇は(B)-C波とカウントされます。

A波とC波が等しく上がる「N計算値」からは、(B)-C波のターゲットは[37,481ドル]が導かれ、この時点でNYダウは史上最高値を更新することになります。



【NY ダウ時間足・エリオット波動分析】

昨年 10 月安値(28,660ドル)以来の上昇(B)波において、A 波は昨年 12 月高値(34,712ドル)で、B 波は 31,492ドル(3/15 安値)で各々終了し、そこから C 波が展開中とみています。

C 波の上昇第(iii)波は 35,679ドル(8/1 高値)で終わり、そこからは第(iv)波調整に入った模様です。

ちなみに直近の下げにより、昨年 8 月(当時の高値は 34,281ドル)から今年の 7 月にかけて 1 年近くにわたり、NY ダウの上昇を悉く跳ね返してきた水準に近づいています。

テクニカル的に昔の上値抵抗レベルというものは、将来の下値支持レベルとして働く傾向が強いとされます。ここからの NY ダウの下落余地は乏しいと思われます。

【8 月 18 日 9:21 更新】

ナスダック



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

21年11月高値からの調整は、プライマリー級第④波に位置付けられます。この第④波の全体像としては複雑な、時間がかかるパターン(トライアングルなど)になることが見込まれます。

22年12月安値・10,207を起点とする上昇は、④-(B)波に位置付けられます。(B)波は基本的に、三波構成(A-B-C)で展開していきます。

今年2月より筆者は、ナスダックが14,646(22年3月高値)を目指す展開を一貫して予想してきましたが、それはほぼ達成されました(7月19日には一時14,446まで上昇)。

米長期金利が上昇したことを嫌気し、直近ナスダックも値を下げていますが、1年前の高値(13,181)付近は強いサポートレベルとみられます。ここからの下げは限定的でしょう。

米長期金利の上昇も長くは続かず、遠からず低下基調に転じる可能性があります。

【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)・エリオット波動分析】

昨年 10 月安値 (2089) 以来の上昇は④波中(B)波の上昇に位置付けられます。

この(B)波は継続中とみています。その理由としては、米長期金利上昇が—これが直近のハイテク株下げの大きな要因です—近いうちに落ち着くとみられるためです。

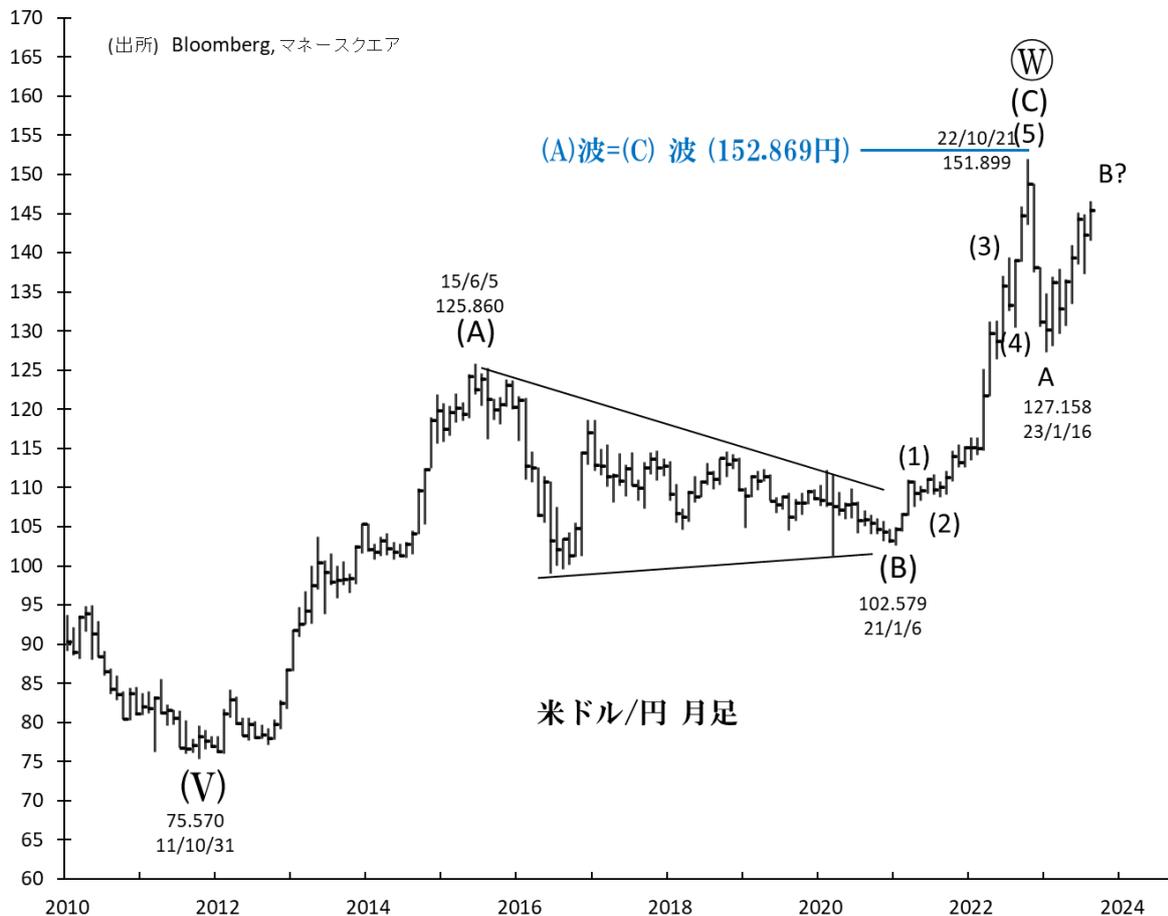
3855(7/17 高値)からのパターンは「エクспанディッド・フラット」とみられます。このパターン中、3875(7/31 高値)からはマル c 波による下落に位置付けられます。

直近で 75 日 MA を下回ったため、目先で下値模索が続きそうです。5 月 25 日~26 日に空いたマド [3347-3386]が、下げ止まる水準として注目に値します。

【8 月 18 日 8:55 更新】



米ドル/円



2011年10月に付けた75.570円を起点とする、(A)-(B)-(C)“ジグザグ”パターンによる円安は、151.899円(22/10/21)を以て終わったとみています。この先はおそらく2028年頃まで、米ドル/円はレンジ相場を形成していくでしょう。

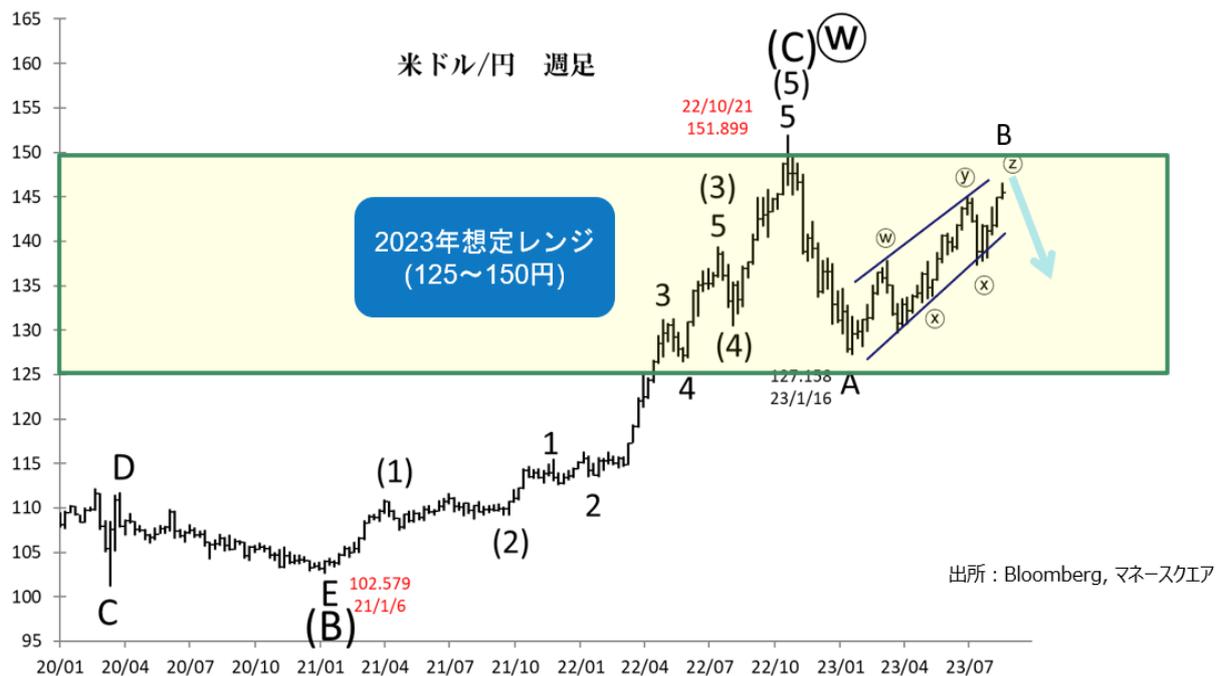
【月足・エリオット波動分析】

通算11年間の(A)-(B)-(C)円安は一括りでⓂ波とラベリングされ、10月以来の円高局面はⓍ波とカウントされます。このⓍ波が将来的に、例えば1ドル=100円を大きく下回る(米ドル安・円高)可能性は低いでしょう。

もっとも、Ⓜ波が通算で75円幅という大きなスケールの米ドル高・円安となった以上、それに対する反動としてのⓍ波のスケールも相応に大きなものになります。

具体的には2015年6月の[125.860円]、Ⓜ波の38.2%戻り水準である[122.741円]、これらはⓍ波のメドとして適当です。

ちなみに(A)波(2011年10月⇒2015年6月)はおおよそ50円幅上昇し、2016年6月(英国国民投票でEU離脱決定)まで25円程度を引き返しています(半値戻り)。今回も(C)波の上昇幅はおおよそ50円ですから、以前のように25円程度の円高が起きるとみれば125円辺りが適当なメド、ということになります。



【週足・エリオット波動分析】

年初に立てた、筆者による年間想定レンジは[125 円-150 円](中央値 137.500 円)です。

1 月 16 日に付けた 127.158 円は、レンジ下限に近いものでした。

翻って直近では、米ドル/円は 9 カ月ぶりの高値水準(146 円台半ば)へ上昇し、想定レンジの上限に近づいています。

127.158 円(1/16)からの米ドル高・円安 B 波の波形をみると、これまで波の重複(オーバーラップ)を伴いながら、[上昇ウェッジ]Ⓜ-Ⓧ-Ⓨ-Ⓧ-Ⓩを形成しています。これは弱気パターンであり、B 波の終了及び C 波(米ドル安・円高)の接近を示唆しています。

ひとたび C 波入りとなれば米ドル/円は、いずれ(今秋～年末頃にかけて?) 127 円～125 円を打診することになるでしょう。

【時間足・エリオット波動分析】

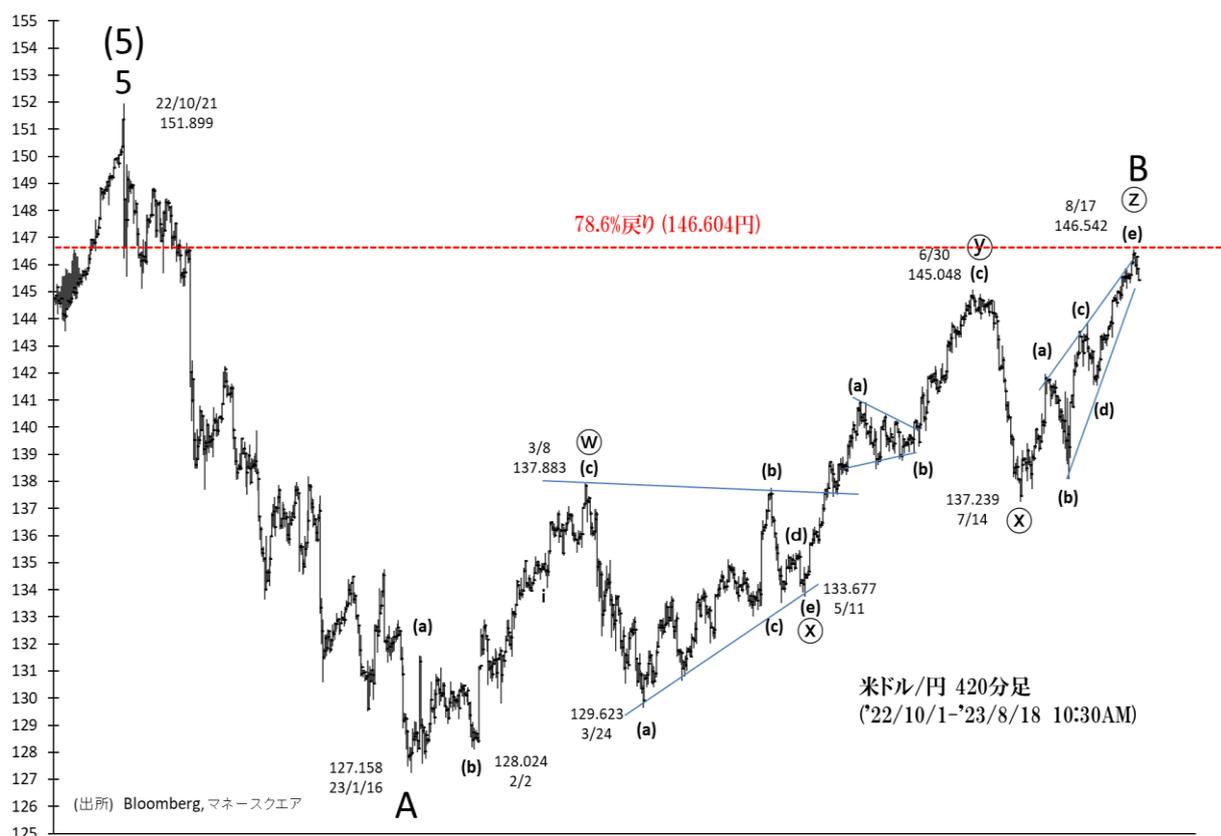
137.239 円(7/14)から直近にかけて、リバウンド B 波中Ⓩ波が展開中とみています。

このⓏ波も「上昇ウェッジ」もしくは「ダイアゴナル」とみられ、B 波全体と同じパターンが現れています(フラクタル)。

8 月 17 日、米ドル/円は 9 カ月ぶり高値水準の 146 円台半ばを付けました。これにより、[146.604 円](昨年 10 月から今年 1 月までの円高に対し 78.6%戻り水準)まで来たこととなります。

127.158 円(1/16)からのリバウンド B 波はいつ終わってもおかしくなく、ここから米ドル/円の上値追いは控えるのがベターでしょう。

【8 月 18 日 10:55 更新】



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引や取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
